

新膀胱造設術後患者の術後回復期における心理的变化について

西病棟3階 ○太田あや 中村千鶴 小林紗緒里 三坂里実 中村由美子 富田静江

《key word》膀胱腫瘍、新膀胱造設術、心理、排尿状況、ボディイメージ

はじめに

膀胱腫瘍に対しては近年、治療法のひとつとして新膀胱造設術が選択されている。この手術は膀胱全摘後、回腸で形成した新膀胱を尿道につなぎ、そこに尿を貯め、従来の外尿道口から排尿する。自然に近い排尿スタイルであるためパウチを必要とする回腸導管や尿管皮膚ろうに比べボディイメージの変化は小さい。患者は、術後、定期的な排尿や、自己導尿、自己膀胱洗などの排尿に関するセルフケアの獲得が必要となり、私たち看護師は指導的な関わりが求められる。患者と接し、ケアを行う中で、セルフケアの確立が困難であった症例を経験し、この術式でも手術後より患者にはボディイメージの変化が起こっていると感じた。これまで新膀胱造設術に関して退院後のQOLに焦点を当てた研究はあったが術後回復期の患者の心理的側面に焦点を当てた研究はない。そこで今回、術後回復期の精神的サポートを含めた看護ケアの向上につなげるため、手術を経験した患者の語りから患者の心理的变化を明らかにしたいと考えた。

I. 目的

新膀胱造設術後患者が術直後から退院までどのような心理的变化をたどったかを明らかにする。

II. 研究方法

1.研究デザイン:質的記述研究デザイン 2.対象:2004年1月から2005年5月にA病棟(一般病棟)に入院し新膀胱造設術を受けた患者7名。表1に対象の背景を示す。3.倫理的配慮:研究対象者に研究の趣旨について説明し研究参加について承諾を得た。面接はプライバシーが保証される場所で行い、時間は30分程度とした。データ収集の際には情報が患者個人を特定できないように配慮した。4.調査期間:2005年7月から2005年10月 5.データの収集および分析方法:カルテ・看護記録より術後経過を把握。その後研究者1名が対象者に半構成的面

接を行った。面接内容は対象者の許可を得て録音し逐語録を作成した。逐語録から心理的变化に関する内容を抽出し、カテゴリーとして分類し、研究者間で検討した。

表1. 対象の背景

対象	年齢	手術日	自己導尿・膀胱洗の指導の有無
A	64	H16.4月	無
B	76	H16.7月	無
C	66	H16.12月	有
D	60	H17.1月	無
E	62	H17.5月	有
F	58	H17.7月	有

III. 結果

1.術後の回復過程の4相区分(F.D.モア)と、新膀胱造設術後の回復過程を照らし合わせ、術後を4つの期間に区切ることが出来た。2.研究方法に基づき分析した結果、表2に示すとおりコード、サブカテゴリー、カテゴリーが得られた。

IV. 考察

- ①手術～一般病棟転棟:新膀胱造設術は長時間に及ぶ手術である。手術による侵襲は、患者の循環・呼吸・身体機能などの身体機能、生命エネルギーを著しく低下させる。モアの回復期の4相区分によると第1相(傷害相)であり、患者の意識・関心は身体及び、その周辺など狭い範囲に限られるとされている。この期間に得られたカテゴリーは「ルート類への驚き、認識、不安感」「強度の不安や苦痛」であった。これらは、術直後の患者の苦痛や身体への侵襲が大きいことを示しており、また、患者の意識・関心は狭い範囲に限られていることがわかる。そのような状況下でも患者は「新膀胱造設術であったことへの喜び」を感じている。手術が予定通りの術式で行なわれたことに患者の関心が向いていることは特徴的である。
- ②一般病棟転棟～ルート類抜去:この期間はモアによる4相区分においては第2相(転換期)に相当し、1相に比

べ、生理的ニードは満たされ、患者のニードはより高次へと進む。また、意識・関心の及ぶ範囲が拡大する時期であるとされている。この時期の心理的变化としてモアは『依存と自立の要求を揺れ動く』¹⁾としている。患者の心理は健康状態の回復に向けての期待と、身体の変化(ボディイメージの変化)との現実の間で葛藤し始めると考えられる。身体面では7,8本のルート類が一つずつ抜去され始める時期である。患者は「ルート類の拘束による日常生活の制限と苦痛」「疼痛による苦痛」のために、体動が制限され、患者の苦痛やイライラ感が強くなる。しかし、ルート類が抜去され、患者は体動が容易になる喜びや開放感を感じ、離床の意欲につながっていると考えられる。栄養面では、少しずつ経口摂取が始まる。手術により腸管を60cm近く切除しているため、下痢、便秘、腸蠕動の低下による腹満感など排便パターンの変調による苦痛が表れやすい。しかし、一方で経口摂取できることが患者の意欲につながっている。

③尿道留置カテーテル抜去および膀胱瘻クランプ～再挿入された尿道留置カテーテルの抜去:尿道留置カテーテルの抜去により、患者は尿道から再び自然排尿を行い、排尿する感覚を取り戻すが、尿意が不確かだということを実感する。また、尿失禁や尿中浮遊物による尿閉が起こる患者もみられる。患者は、「尿道留置カテーテル抜去の喜び」を感じるが、膀胱の喪失による機能変化に伴い、ボディイメージが大きく変化し、「排尿状況の変化への不安」を感じている。この時期において患者は、排尿状況表を記載することで自己の排尿状態の改善を実感している。モアはこの第3相において患者は『手術によって失ったもの(こと)を生活の諸局面で実感し、現状理解する』¹⁾としている。排尿状況表の記載により「排尿状況の変化への期待感、受け入れ」につながっていると考える。

④再挿入された尿道バルン抜去～退院:外から観察できる創傷はかなり回復しており、ルート類の制限もなく、患者からの疼痛苦痛の訴えも少ない。そのため私達医療者からは、患者は健康状態を回復したかのように見える。この時期に、退院後の尿閉に対する緊急処置として自己導尿、自己膀胱洗の指導が行われる。患者は、退院に向けて「術後自己管理の必要性への理解」を示し、手技を確立している。しかし、体内にカテーテルを挿入する不安など、「新たな手技(自己導尿、自己膀胱洗)獲得への不安」や、「自己導尿を継続していくことへの負担感」を感じている。

一般的に心理面の回復は身体面の回復よりも遅れを見せるといわれている。③の時期に引き続き、患者は膀胱喪失による機能変化のために、ボディイメージが大きく変化している。ボディイメージを再構築させつつ、新たな手技を獲得するために、手技の確立には時間を要すると考えられる。そのような心理面の回復を考慮に入れ、指導を行う、不安を傾聴するなどの援助が必要であると考えられる。

今回の研究では、患者によって手術後から面接をするまでの期間に相違があったことが、今回の研究の限界といえる。

今後は今回の結果をもとに研究を進め、術後回復期の精神的サポートを含めた看護ケアの向上につなげることである。

V. 結論

- 1.膀胱造設術後患者の回復過程においては、モアの回復期の4相区分に見られるような一般的な回復過程と類似した心理変化が見られた。患者にはボディイメージの変化が見られ、それは膀胱喪失に伴う機能変化によって起こっていると考えられた。
- 2.排尿を含めた身体状態の変化により、患者は不安を感じている。しかし、患者は自己の膀胱機能の把握や、セルフケアの確立により、徐々にボディイメージを再構築させていることが明らかとなった。

引用文献

1) 宮崎和子:一般外科I,p.151,中央法規,2000.

参考文献

- 1.藤沢正人:回腸導管 VS 自排尿型代用膀胱早期合併症,Urological Nursing第8巻(2),p25-30,2003.
- 2.氏家幸子,泉キヨ子:成人看護学,B.急性期にある患者の看護II,p334,359,廣川書店,2001..
- 3.谷口貴子:泌尿器科がんの拡大手術の適応と術式,がん看護8巻(6),p478,2003.
- 4.吉田修:ベッドサイド泌尿器科学,第3版,p464,465,南江堂,1999.

表2 カテゴリーとコードの一覧表

コード	サブカテゴリー	カテゴリー	
①	<p>たくさんのライン類に驚いた。 ライン類を認識した。 怪獣、改造人間。 自分の体ではない。 ネオブラダーだったことが嬉しかった。 ネオブラダーだったと聞いてわかった。 リンパ節や尿道は大丈夫だったと聞いて安心した。 安心した。転移が少ないからネオブラダーができたのだとわかった。 回腸導管ではなくて安心した。 自分で手をあててみてネオブラダーだとわかった。 無事に終わった。 終わったと思ったが、特に何も感じなかった。 忘れたい、覚えていないことが多い。 痛みが気になっていた。 苦痛の原因が分からないが体がひどかった。 文句ばかりだった。 呼吸できないことが強い苦痛だった。 幻聴が起った。それしか覚えていない。 幻聴に対して怖いなど思った。 想像通り。 死体安置所。 個室が寂しい。</p>	<p>ライン類への驚き ライン類への認識 自分の体ではないという認識 ネオブラダーであったことの喜び 聞いてネオブラダーと認識 転移がないと認識し安心 手で触れてネオブラダーだったと確認 手術が無事に終わった安心感 手術が終わったことを認識 忘れたい、覚えていない 疼痛の発生による苦痛 原因の理解できない全身の苦痛 苦痛が軽減されない不満 呼吸苦の苦痛 幻聴への恐怖 想像通り 死体安置所 個室での孤独感</p>	<p>ライン類への驚き、認識、不安感 ネオブラダーであったことへの喜び、安心感 強度の不安や苦痛</p>
②	<p>手術をした事へ感謝する。 せつかもらった命だから我慢する。 自分にも力があつた。 歩き出せるのは当然の事と感じた。 歩行に対して前向きな気持ちだった。 頑張つて体を動かそうと思う。 ラインが抜けることで楽になったが、血尿が心配だった。 ラインが抜けることで回復を実感した。 ラインが抜けることで体動が楽になった。頑張ろう。 ラインが抜けるとほっとする。嬉しい。 ラインが一つ抜けて嬉しい。ラインの多さが何とかならないかと思う。 ラインが抜けることで大感激。 ラインが抜けることで嬉しい。 歩くようになってライン類は邪魔だった。 ラインがたくさん繋がっていることは仕方がない。 ラインがたくさんあることで不眠になった。 ラインによる体動制限で腰痛、不眠になった。 体動が自由にならない。 体動が自由にならず、イライラした。 管が思うより短かった。 ライントラブル以来ラインを気にしていた。 少し歩いたら疲れた。 予想以上に苦痛が強い。経口摂取できないことが辛い。 怖いので経口摂取を控えている。 流動食は食べられない。 食べなくてはいけないが、食べられない。 経口摂取できることが嬉しい。健康を取り戻す。 経口摂取できることで健康を取り戻す。 下痢と便秘を繰り返すのはどうしてか。 下痢便に軟便が混ざっていた。 便漏れたわ。 下痢している。 おなか全体が痛いの。 便が出て腹痛が治まった。 術後腹痛が変わらない。我慢せんと仕方ないやろ。 腹痛がづらい。疼痛を我慢したくない。 軽い腰痛がある。 腰が痛くて何より苦痛だ。 ライン類が疼痛の原因となった。 ラインの挿入部が痛い。鎮痛剤がほしい。</p>	<p>手術したことへの感謝の気持ち 回復への期待 体力の回復を実感 歩行に対する前向きな気持ち ライン抜去で回復を実感 ライン抜去で回復へ意欲的 ライン抜去への喜び、ライン類への不満感 ライン抜去への喜び ライン類が歩行、体動の障害 あきらめ ライン類の拘束による腰痛、不眠 ライン類による体動の制限 ライン類へのイメージ不足 体力の低下 経口摂取への不安 食事への不満 経口摂取への期待感 下痢、便秘の繰り返し 腹痛 腰痛 ライン挿入による疼痛</p>	<p>回復への期待感と実感 ライン類の拘束による日常生活への制限と苦痛 経口摂取への期待と不安 排便パターンの変調に対する戸惑い 疼痛による苦痛</p>
③	<p>進んで記載していた。 管理をすると自信がついてくる。 自分なりの工夫ができた。 感覚のみでトイレに行っている。 尿閉の原因になることは理解できる。 腸粘膜の排出と尿閉の関係が理解できる。 不快感はない。 今後も排尿状況が改善していく期待がある。 術前に比べればよくなった。 管がなくなって安心した。 自尿が出て嬉しかった。 尿線が細くなった。 オムツ交換が面倒だった。 排尿した感覚がない。 尿閉が不安だ。 バルーンの閉塞が気になって眠れない。 たまに尿閉がある。 排尿状況のコントロールができるか心配。</p>	<p>積極的な記載による自己管理能力の向上 新たな排尿管理への取り組み 尿閉の原因の理解 今後の排尿状況の改善への期待 バルーン抜去への喜び 排尿パターンの変化 尿閉への不安</p>	<p>排尿状況の変化への期待感・受け入れ バルーン抜去の喜び 排尿状況の変化に対する不安</p>

<p>今後もバットを使用していくのは抵抗がある。 今後の排尿状況の改善がみこめなくて焦る。 初回尿には排尿時痛があった。 尿意は全然なかった。 排尿チャートの記載は面倒だ。 意味がない。 昔ではないが医療者の言うなりだ。 見た目におかしい。 腸粘膜と理解できない。</p>	<p>今後の排尿状況への不安 尿意の欠如 排尿チャートによる管理への煩わしさ 腸粘膜の排出への抵抗感</p>	<p>排尿状況の変化に対する不安</p>
<p>新たな排泄行動が加わったことがショック、わずらわしい。 退院後の尿失禁への不安があった。 指導不足への不満があった。 退院後も尿失禁対策を継続している。 チャートをつけていないと不安だ。 退院後の尿閉が1番心配だ。 排尿コントロールが上手できるか心配。 カテ挿入に対して恐怖心があった。</p>	<p>CICを行っていかねばならないことへの負担感 尿失禁が起こることへの不安 排尿コントロールへの不安 カテテル挿入への恐怖</p>	<p>CICを継続していくことへの負担感 排尿状況に関する退院後生活への不安</p>
<p>④ 1人でできるか不安だった。 介助なしでカテ挿入できるか不安だった。 うまくできず、もたついたことでイライラした。 意欲はあったけどできなかった。 訓練に対する精神的苦痛があった。 退院が決まって嬉しい。心配なことはない。 手技にもたつきはなかった。 CICの必要性を理解できた。 体力の回復が心配だ。 食事には気をを使う。</p>	<p>手技習得への不安 訓練に対する精神的苦痛 退院への喜び、日常生活への自信 手技習得への自信 CICの必要性の理解 退院後の生活への配慮</p>	<p>新たな手技(CIC/自己導尿)獲得への不安 退院後生活に対する喜び、自信 OPE後自己管理の必要性への理解</p>